

★三戦士追悼特集

「ディア・ヤシン」作戦と世界革命

世界革命戦争宣言



★世界革命戦争宣言

六月四日

本日の六・一五集会に結集された闘う日本の同志たち、友人たち、在日朝鮮人民に、世界の人民戦争に連鎖し、不退転に闘いを続けているアラブ赤軍より、心からの熱い握手と、共に闘いを持続させることをよびかけます。抑圧された人民の熱い怒りは、益々世界中のプロレタリアの絆を一つにし、戦場を一つにし、敵帝国主義者と、その手先のどんな妥協の小細工も許しはしないことを更に武装で表現しようではありませんか！

我々、抑圧された人民の言葉は銃であり、抑圧された人民のヒューマニズムが、武装闘争であることをはっきりと帝国主義者たちに教えてやる時なのです。敵帝国主義者と、その手先イストラエルシオニストのしりうまにのった日本帝国主義の岡っ引き佐藤反動政府は、アラブ赤軍三戦士の戦争をヒューマニズムという彼等の言葉で陰へいしようとし必死になっている。彼等がヒューマニズムと言えはいうほど、我々は、抑圧さ

れた人民の歴史を想起するだけだし、抑圧されればされるほど、我々は、強くなるだけだということを、更なる闘いで教えてやるうちはありませんか。

宗教という情念を帝国主義と結合することによってシオニズム運動を人工的に創りだし、パレスチナ人民のすべての土地を奪い出したシオニストイスラエルに、我々の闘いが正当であること以外、何も認める権利はない。我々アラブ赤軍三戦士のパレスチナ戦争への参画は、国境を越えたプロレタリアの情念は、帝国主義者に抑圧されているという現実において一つである。パレスチナ人民と、世界の人民の利益の為に、プロレタリアの闘いが一つであることを表現した。我々は、歴史の帝国主義分割戦争によってひきさかれた国境を越えつづけるであろう。そして、現実存在する生地日本革命に同時に責任を負うであろう。

闘う同志諸君、友人たち

世界の諸情況は、日本革命が、世界の人民戦争の波に連鎖し、共に闘うことを要求している。革命の根拠地は、人民であり、革命の世界的な逆流は、日本革命戦争の、巨大な成長をうながしている。歴史的に武装解除された情念を武装すること！歴史的に、日本人民が自らの手で闘う術を発見した火つけ、うちこわしの様に。徹視的な情況認識は、武装解除された情念で、武器をとり、とりかえしのつかない失敗を犯さずだろう。

同志たち、友人たち、父親たち、母親たち、国境を超えたアラブ赤軍兵士は、生活として闘いを知ったし、国境を超えた革命は、深く、日本革命にたどりつくだろう。我々は、歴史の中で革命の尊い犠牲となつた数多くの無名戦士のように自らの生活を、闘いとして貫くだろう。我々は、あらゆる困難を、我々のパトスのバネとするだろう。

三戦士の最後の言葉は以下である。

「我々は、どこでも死ぬ用意がある。そして、地獄でもう一度革命をやる為に先に行く。同志たち、友人たち、我々は決して失敗はしない。我々の闘いに対し決して、葬列をくりだすな、祝賀祭、こそが、我々の革命的死にふさわしい」

六・一五集会に結集された闘う友人たち、死をいたむことなく、革命的に闘いの尊

★アツピール

闘う日本の同志、友人たち

アラブ赤軍によって貫かれた攻撃的陣型は今熱狂的なアラブ人民の歓喜を呼び起こしています。この歌と祝砲が聞こえますか？民族主義政府、リビア、エジプト・シリア・イラクなどの政府までも、赤軍三戦士の勇敢な国境を越えた闘いを一日中ここの一週間支持する放送を流しています。

抑圧された人民は敵の攻撃によってためめ、敵の抑圧によって益々強くなっていることをブルジョアアジアは気付くのが遅すぎたようです。パレスチナ革命戦争を、世界革命戦争の同時・同質的な闘いとして、プ

い犠牲となった樺さんと共に、アラブ赤軍兵士の死を、祝ってやってほしい。革命は、今のぼりつめようとしていく。あらゆるアラブ人民そして、エジプト、リビア、シリアなど、アラブ諸国の政府までも熱狂的に讃えられたパレスチナ人民赤軍兵士の熱い敵権力への怒りを自らのものにし、共に進まんことをよびかける。同志たち、友人た

ロレタリア国際主義の先兵として闘いぬいた赤軍兵士が、日本人民に次のことを伝えてほしいと言っていました。

「国境を越えた闘いは日本革命を保証し、日本革命は世界の人民戦争を押し進める。日本の友人たち、行動と犠牲の上に雄々しく燃えている革命の歴史を継承し、世界の友人と共に進め、隊伍を整えよ、敵は一つだ。我々は日本人民の誇りを持って世界赤軍としてパレスチナ人民と戦争に行く。絶対に葬列はくり出さな。ただ祭りを我々と世界革命の友人たちの為に。」

世界の革命的同志たちとの連帯とは、フ

ち我々の闘いの情念は、常に日本人民と共にあり、共に進撃していることをちかう。

一九七二・六・一五 集会にむけて
アラブ赤軍

在 アルジェ

六月五日

エステイバルでもおしやべりでもなく、唯一、共通の敵に向けて武装闘争を貫くことです。我々は、第一インターナショナル、第二、第三、第四の歴史的インターナショナルを武装闘争を軸とした世界革命戦争の陣型で乗り越える用意がある。我々と共に国際主義をかけた勇敢に突き進むPFLPの同志たち、ドイツ赤軍の同志たちは今、世界革命戦線構築に向けて、あらゆる場所で武装闘争を展開している。人民戦争は我が時間を選ぶ権利を持ち、最も有効な方法で敵権力の打倒に向けた闘いを要求している。

パレスチナ革命の状況の中で、最も有効に闘いを貫き、世界革命陣型の一步を担ったアラブ赤軍は、あらゆるデマゴギーをはねのけ、日本の同志たち友人たちが共に立ちあがることを呼びかける。

我々は日本革命——世界革命を多くのうちの一人一人として、共に想うだろう。

闘う日本の同志諸君、沖縄の抑圧された人民と共に、在日朝鮮人民・中国人民と共に、立ちあがった現職五自衛官と共に、自らの立場を明確に武装闘争に表現して進もう。我々を含むすべての「革命家」は高慢であったし、一人よがりであった。打ちこわし、火つけなど人民の戦うすべてから学

び、共に情念を武装しよう。我々はあらゆる困難を乗り越えて進む。我々はあらゆる場所世界人民戦争の兵士となる用意がある。闘う日本の友人たち、隊伍を整えて共に進もう！

★戦争を知らない革命家たちへのメッセージ

六月十日

地の果てから愛を込めて

すなわち必要なことは、国境とつばらい運動——世界革命戦争なのです。

戦争を知らない革命家は、歌を忘れたカナリアよりも始末の悪いものです。何故なら、さえずりすぎるものだから。

武装された怨念が、ひたすらに現実を憎悪する時、生活となった闘いがふきでる時、私たちは無言で自分の術を発明し、私たちは共に仲間の眼が恋人のようにいとしいことをしよう。未来から過去の透明なまなざしは、今、私たちが、なんてへっぴり腰でやっているか気付くでしょう。

「武装せよ。武器をそして、手から一時も離すまいと誓おう。」爆弾を郵便受に入れることから始まったへっぴり腰は、ただただ自らの内在において武装解除している

ことを証明したのです。武装することは、銃か爆弾かなどという趣味の問題ではないのです。人民の創意しうる武装の情念を組織化すること。敵への確実な思想的、組織的、軍事的ダメージを与える為に。一つの敵にむかって、現在なお、分断された戦場を一つの戦場すなわち、世界革命戦争場とする為に、世界の抑圧された人々が闘いつづけていることを、そしてその戦いが、いかに現実であるかを知らなければなりません。

ん。

帝国主義者の打倒の一点にこそ私たちの怨念ははきだされるべきであって、仲間のつつつきあいはいは、もう何も生まないことを判つたと確信しています。

ナチズムの原罪意識にのつかった逆転した「ヒューマニズム」の強力な波は、帝国主義者の利益を代弁し、パレスチナ人民の権利を一切はくだつし、「イスラエル建国」の「悲願」を一九四八年に決めたのです。あの時から、帝国主義者によって人為的に創られたイスラエルと闘うパレスチナ人民は、問答無用に必然的に反帝闘争をベトナム。

ムの人民と共に担いつけづけています。国をとりかえす闘いは一切の帝国主義の分割戦争を粉碎すること、すなわち、世界共産主義にむかう道のりなのです。イスラエルに無実の市民がいるか？イスラエルに無実の市民が居るとしたら、それはパレスチナ人民の闘争と地下で共闘し、闘い続けている人々だけだ。しかしそれは市民ではなく、革命家であり人民である。

もつとも手を汚したくなかった、又は、汚れた手をたくみに隠していた筈の日本帝国主義者は、不本意ながら、ざまみろ的な結果を生んでしまったようです。

イスラエルに、夜通しかけつけたにもかかわらず、イスラエルと日帝の汚れた手を握り合つたにもかかわらず、問題は、岡つびき大将佐藤栄作にとって、深刻となりました。

この三戦士による革命的闘いがすべてのアラブ人民に熱烈に支持されているが故に、すでに、日本商品ハイセキと、石油売買禁止の声がアラブ人民、アラビヤ語新聞、そしてアラブの民族的政府間からも湧きあがっているという現実です。

「世界革命の波を同質にとらえる」なんて格好の良いことを言う戦争を知らない革命家たちは、三戦士が現実には彼らの呪文を越えて闘っていることに気がつきがくせんとして、日本革命の放棄の傾向などと負け負しみを言いかねないのですが、日本革命の蜂起の傾向の萌芽がこの闘いでしめじみ判らない人々に、世界なんて軽々しく言ってもらいたくありません。

波に乗るな！
私たちの戦争は公然とはじまっている。
PFLPの同志たちと共に、ドイツ赤軍派の同志たちと共に、トルコ人民解放軍の同志たちと共に、世界革命戦争統一戦線の構築にむけて更に大胆に私たちは進む。そして、真に闘う日本のあらゆる友人たちと手をつなぐ用意がある。世界の帝国主義者打倒にむけて私たちの差し出す手を握りしめてほしい。そして日本の友人たち、私たちは日本革命に当然責任をもち闘うことを約束する。国外から現在しうるあらゆる協力を望んで引き上げる用意がある。
友人たち、闘いにむけて大胆に進もう。
戦争は始まっている。

六月一〇日
在アルジェ アラブ赤軍派

★アラブ赤軍からのテーゼ

六月十五日

A 我々はテルアビブ銃撃戦を
かく戦った

世界的な帝国主義者間の抗争の展開は、一方の軸に巨大な世界プロレタリア独裁の萌芽を形成し、現在、世界的規模による真に闘う部分の結合、世界革命戦争統一戦線が、確実にその意識性を持って流動を開始している。特徴的には第三世界の武装闘争主体と、先進国階級闘争の質の結合として表現される都市ゲリラ派とか、過激派とか呼ばれるもつとも先鋭部分との武装闘争の共有に表現される。(トルコ人民解放軍の在トルコ、イスラエル高官殺害、ドイツ赤軍派によるベトナム侵略反対のアメリカ兵の誘拐、日本赤軍派(在アラブ戦士)によるテルアビブ空港襲撃、ヨーロッパパマイオストによるベنگアルディッシュ支援ハイジャック、ドイツ赤軍と、パレスチナ戦士による日本赤軍戦士岡本同志の奪還闘争¹が目につく)。

こうした世界革命戦争統一戦線構築にむけた意識的な闘争交換の戦術は、日本赤軍派が、六九年六月、世界党——世界赤軍——世界革命戦略を定立した世界史的認識が、その矛盾の直接的、集中的環としての第三世界人民によって、敵との攻防の中で、実践的な行動様式として登場しているという現実であると言える。

パレスチナ革命においては、シオニズムと対決するパレスチナ人民の闘いの質が、自然発生的に世界革命戦争へと、その回路をたどっている。それは、シオニズムの第一次大戦以前から現在に至る歴史的経緯の中から証明されるようにシオニズム運動が、世界の帝国主義者間の抗争の巨大なヘゲモニーを持っており(流通機構、通信機構、宇宙に至るアルジオアジの戦略的利益を、シオニストがかなりにぎっていること)中東に人工的国家イスラエルを設置することによって、第三世界の自然源(石油、ウラン、ダイヤモンド)搾取、収奪する拠点

となっており、一方ヨーロッパ、アジアを共産主義運動から防衛するための、世界帝国主義の戦略的位置にあり、イスラエルの存在そのものが、世界の帝国主義者の表現なのである。それ故、イスラエルに奪われた土地をとりかえす闘いは世界的な帝国主義者の利益のとりでと化しているイスラエルと闘うことが、即、世界のシオニズム運動に連鎖した世界の反革命と闘うこと、すなわち世界革命への道へと、必然的に自らの主体を実践的に闘いの中で、位置させてきた。パレスチナ人民の闘いが、そのことを明確に証明している。それ故、存在として第三世界でありながら現実には先進国革命の二重の戦争形態が要求されており、その必然は世界中を戦場とせざるをえないのである。こうしたPFLPを軸とする世界革命統一戦線構築の作業は、経験的な良質さから問題意識として発生しつつも未だ世界革命の組織戦略として登場しえていないが故に、戦術的であり、世界革命統一戦線が単一の

としてその対峙段階を表現しており、先進国のゲリラ戦による味方内部の質と量の拡大が、第三世界の戦線（前線）を後方として支え、逆に第三世界の国境を越えた闘いが先進国の後方として支えるという相互関係から戦線（前線）と銃後が常に銃後と戦線（前線）として敵に對置しうる質的な位置にあること。第三世界の後方としての先進国の闘いの質が、戦線（前線）としてその抑圧者の命にとどめをさすか否かが総攻勢へのカギとなっている。

② 戦争

ゲリラ戦は、世界的に戦略的位置を占めており、組織戦略の統合の環となっていること。その目的意識的な闘い方こそ、世界の戦場を一つにする方法であり、（総攻勢に至るところの）ことに、先進国のそれが問われていること。しかしながら、なんといおうとも、日本の革命戦争の流れの中に、自然発生的な闘い方としてしかそれが定着していないこと。諸党派の「目的意識的な闘い」という言葉に表現される闘いが、歴史の流れの正直な答えによれば、結局は、いわゆる「ゲリラ戦」が、ゲリラ戦でなく、近視的な日帝のリアクションとしてしか存

在していないという事実をあげることが出来る。日本でのゲリラ戦は、七〇年ハイジヤック闘争にはじまり、その後、無に等しいというのが歴史が証明している事実といえる。

③ 長期的持久戦であること

それ故、革命戦争は世界プロ独運動を、世界の革命勢力との相互の認識を一体化するという共産主義化の闘いを、国際的地下兵站線（戦士の交換など）の実践を通して前線―銃後―銃後―前線の、世界的同志的絆と、同質化を必要としていること。主要には、日本赤軍派が、先駆的ということにおいてであれ、日本革命を領導して来た事実をふまえ、もつとも困難な中で、もつとも困難な方法で、あらゆる日本の革命主体に現実の世界の流れを着実に武装闘争で伝達し、日本革命戦線を網羅するという作業こそ、逆に、世界の人民戦争の流れ、ことに現在構築されつつある世界革命戦線の主要な担い手として、説得力を持って世界史を領導するカギとなること。アラブ赤軍は、日本革命にとつては、現在の対峙期には銃後として位置しており、前線は常に、日本の風土、社会、歴史に規定された日本人

を解放革命する作業の主体者たる日本赤軍派であること。この陣型を軸に、持久戦争を勝ちぬかねばならない。

④ 党―軍のあり方

日本の現在の状況の中で、人民を領導する党は大衆の武装の情念を引き出すためのゲリラ戦を通し、自らの存在を確固とした共産主義者の党に高めない限り、再び、唯武器主義に転落してしまうということをつきり認識すべきである。闘いは、武器の問題でなく、武装の問題であり、大衆と同次元の意識性、献身性、勇気しか持ちあわせておらず、大衆より学問的にマルクスを知っていることをひけらかしても、大衆はみちびきの糸として確信的に続くよりも、うんざりするが常である。

プロレタリア世界そのものが、世界党―軍としての実態をいまだ持ちえておらず、その意識性に支えられた世界革命戦線への萌芽であるという世界共産主義政治の現在段階をふまえ、日本赤軍派は自国、世界（世界に直接かかわっている支部）の主体構築の作業の指定をぬきに、ゲリラ戦を展開しても、日本の革命主体に対する提起（統合の軸）にはならないことを心に銘記

すべきであり、いいかえれば、日帝の政治過程を軍事的に、リアクションとして闘いつづけるという旧来の闘い方だけでは戦争を準備する党としてのヘゲモニーがいつまでたっても確保されないことを知るべきである。

「大衆との共存関係」戦闘にいたる勝敗の八〇％は調査活動にある」という戦闘の原則を、軍事という言葉で合理化し、いわゆる「軍人」のみに党のヘゲモニーをゆだねようとする建軍活動とは、潜在軍事の質を切り捨て、顕在軍事のみで闘おうとする敗北主義の道であり、プロレタリア革命の道案内人―すぐれた共産主義者である革命家を主体の側に創造する可能性を合理化するものである。党―軍という発想に欠落する未来の表現者としての共産主義的人格を根底から発見し、その過程における党の軍人化と軍の共産主義化を勝ちとらねばならないと考える。それは言葉のいじくりまわしから離れ、自らの力量を客観的に計算し、党の現実段階における能力に応じたゲリラ戦を準備し、勝ちぬくその過程こそ、日本革命派統合の道であり、軸であることを再度わきまえるところから始めなければならない。

ない。

⑤ 反スタ戦略派との徹底的な論争が必要である。

歴史性からのスターリニズム、修正主義の把握をぬきにした反スタ論は日共へのアンチテーゼとしても、大衆に有効性がないばかりか、革マル・中核に表現され、感性的に森グループにもうけつがれている反スタ主義者によるスターリニズム（又は、もつと腐敗し、革命の歴史性を持たないブルジョア政治）は、世界の革命戦争の現実と日本の革命戦争の中で客観性を欠く一助を担っている様に思われる。一国主義政治を打ち破る我々の組織戦略は世界革命戦線構築の、長期的な過程を経て、「社会主義」国家群を二者択一的な状況においつめる、

「労働者」国家内部からの反修闘争を、世界革命戦線の共通の担い手としてその組織化を、実態的な連鎖とすることである。無責任な反スタ戦略は、自らを自閉症にするし世界の人民戦争の中で、輝かしく戦略的立場をわきまえてつづ闘っている（又は、支援している）いくつもの歴史的制約の途上にある「一国社会主義」国家の限界としてとらえず、敵対関係に陥らせてしまうだけ

である。真の革命に敵対するソ連に表現される修正主義路線を粉砕するということは、自国の闘いの自力更生を基調とする世界革命戦線構築の実践的な世界共産主義政治再編の中に位置している。

⑥ 単一世界党―世界赤軍―世界革命戦線構築にむけて

実態的な自国での闘いに裏打ちされた戦略論が、世界革命統一戦線の領導の環であり、国際地下兵站線の確立活動（世界革命の永続性を保障する各国革命主体への質的な銃後の形成であると同時にこの確立にむけた闘いは、世界の帝国主義者と物質的に対峙する闘いであり、ことに第三世界の自然源―多くの民族解放戦線が解放区にそれを管理している―を、革命主体の共有財産として、革命派内部に生産活動を獲得し同時に帝国主義者の戦略的野望、自然源の略奪を阻止し、世界帝国主義者の再生産をプロレタリア階級の生産活動へと拡大発展させる対峙を作り出すという二重の意味を負っている）の中に、単一の世界党―軍の質を世界革命統一戦線構築の表現に内包しつつ、他組織との批判運動を通して同質化を発展させることが戦略的陣型への方法であ

る。そのことは、日本国内においても同様であり、純粋軍事を、又は他方、純粹戦略論を他党派との結合の軸とするのは誤りであり、世界の戦争発展を意識的に逆流し、認識論を一体化させるという方向に、組織実践をわきまなければならぬ。すべて現実を見ること、かぐこと、知ることから出発するのである。

以上、概括的な意志統一を軸として、アラブ赤軍は闘いの持続発展の任にあたる。日本の同志が考えきれない程、世界は狭く世界の同志が確実に同じ情念を持つて一つの敵にむかっているという認識を我々は持っているし、それは日本の同志にも共有してほしい情念である。

日本革命戦争の銃後と同時に、パレスチナ革命の前線を担う我々の母体は日本赤軍派であり、戦争の永続性を内的、外的に保証しうる国際的な地下兵路線の形成とは、世界の戦争派並びに日本革命への援後射撃であり、アラブ赤軍はそうした位置をふまえ、自らの力量に応じた力を発揮しつづける用意がある。もちろん、この地における敵と味方の力関係（味方を限定的につづみこんでいるアラブ進歩勢力（国家）とは抗

争的でありながら協力関係にある）が、更なる味方内部の強化へと発展しつつあるアラブの現段階と徹底的な少数者としての自らが、日本革命の勝利にむけて困難な中を歩きつづけている日本の同志との状況には闘いの方法、戦争の認識も、現在差異はあると思うが根底的には世界革命戦争に至る闘争に内在する世界共産主義運動という一つの流れに位置しており、一つの敵にむかって戦場を一つにするための人類最後の世界革命戦争であるという同質の方法と認識の上に立つことこそ、自国での戦争形態が発揮されるものと考えている。

その質を更にふみこえてつぎすすんだアラブ赤軍兵士）の質は、敵との関係など場所的に違う状況とはいえ、世界革命を領導するはずの日本赤軍派戦士が確保しなければならぬ内容であり、それは抽象的な論議ではなく自らの生活様式を、情念を、徹底化する作業としてあり、もつとも抑圧された日本の中の人民との謙虚な結合、根底への接近、同質化を通して始まるであろう。

あらゆる反権力の闘いを革命主体の空間に位置させるといふ作業、プロレタリアの能動性を組織化する人民の導きの糸となる前衛の任務を、もつとも困難な中から学びとるといふ赤軍のころろ・フェニックスとしてはばたくことこそ、今、日本赤軍派に課せられている歴史的栄誉ある任務としてあるはずである。

C 日本赤軍とアラブ赤軍の任務

イメージの先行的確信に裏打ちされた赤軍派の戦略論は、いまだザル的なところがないとは言えず、ことに現実の世界と日本のかかわりの組織論的な指定が不十分なために、日本赤軍派とアラブ赤軍の関係が明確でないことは相互の作業を困難にして来

た。そのことを経験的な立場からイメージを確定し、関係を明確にしたいと考えている。

① 旧来の第一インテラーから第三インテラー（第四インテラー）に至る国際共産主義運動の歴史的な位置と、その限界をふまえたうえで、我々の世界党―赤軍―世界革命戦争統一戦線の主体構築の闘いが単一の世界党建設を掲げ、軍事兵路線を軸として潜行的に準備する国際地下組織に保障された世界革命戦争への道であること。

この質にささえられた世界革命戦争統一戦線構築の過程は、世界各国の革命派物質的軍事的表現として世界共産主義政治を再編する位置にある。（その認識のもとに、在外支部は世界の革命派との批判―自己批判を運動として同質化させる作業を開始している）

② 現在、本来的には日本赤軍派は在外支部建設の母体であり、在外支部の認識を常に相互に同質化させる主要な位置にあり、その作業を通して自らの存在を、日本一国に規定された関係を越えて逆に日本革命への実際的な指導を可能とするのである。在外支部は、支部のある場所における前線と

されていない表現とも言えるのである。こうした「同志」がいる限り、アラブ赤軍の日本赤軍派への対話は成立しえない。もしも我々が機密を伝え、それが「同志」を通じて敵につつぬけになるなら世界の革命主体を裏切り、敵に売り渡すことになるのだから。敵はCIA、イスラエル秘密警察に表現される白色テロ団であり、萌芽しつつある真の戦線はひとたまりもなく一瞬にして世界革命の展望を喪失するだろう。そしてそれはあとでいかなる責任をとってもとりかえしのつかないことなのである。

パレスチナの戦士たちが、いかに敵を殺すかという感性と日本にいる戦士がいかに敵を殺すかという感性には、決定的な違いがある様に思われる。すでに生活体験として、敵と肉体情念でたちむかうパレスチナの戦士たちにとって、いかに殺すかという感性は、同時に自らの死の当然性をこえて闘いにいどむことを意味しているからである。しかし、日本の同志が、いかに敵を殺すかという場合、自分を決して危険な場所におかない様にしか戦っていない。我々は、はつきりとこの違いをみとめなければならぬだろう。このパレスチナ戦士（そして

しての任務を、場所を共有する同質の革命派と共に軍事的にも担い、主体を世界に高めつつ、世界党建設の意識性を堅持し、日本革命の銃後としての（すべての世界革命主体への銃後となるが）国際地下兵路線を潜行的に準備し、その一個三重の闘いは世界党の萌芽を、日本赤軍派と共に担う位置にあること。

③ 在外支部は、赤軍指令部に直結し（現段階では本来的には母体たる日本赤軍派の軍事政治最高指令部）現段階で、各在外支部の責任者は同時に日本軍事政治最高指令部の一員であり、その指令部体制は世界党の萌芽の根幹となるべきである。在外支部の責任者ならびに在日指令部の代表は年一回定期的な会議を労働者国家などで持つことによつて、相互点検し合う。（指令部の事務局を設置し、各支部の連絡にあたりこれは指令部の統括下におくべきである）

現段階におけるこの軍事政治指令部は、日本革命の責任ある主体として日本革命派を準備し闘いを持続させるという最大の任務に集中することこそ、在外支部の質を逆に強化するのだということを確認したい。

④ 自国帝国主義打倒を実態的に闘いぬくその内的な発展は、日本赤軍派及び在外支部の世界革命戦略の物質化にほかならない。しかし、在外支部の闘いは同時に、在外支部の存在地では勇敢に戦場を他の革命派と担うという観点があり(このことぬきに、しやべりまくつても同志的絆はうまれぬ)そのことをぬきに、日本赤軍派が機能として在外支部をとらえるという対応(過去一年有余はまったくそうであった)は、国際主義の現実に対峙するのだということを感じてはならない。

⑤ 日本における革命戦争の発展は、世界の戦場を統後としてささえる国際主義の位置にあり、(ベトナム、パレスチナ人民の闘いにとって日本革命の発展は現在後方としての巨大な役目をはたす)それ故、在外支部の闘いは日本革命と強力に連鎖した戦略の次元で軍事政治組織総体に渡る絆を必要とする。在外支部の活動そのものが間接的、媒介的な、戦術次元ではないこと。この戦略的相互関係こそが、世界革命—日本革命の永続的な表現となる。

⑥ 国際地下兵站線を真の革命派の武器となる様建設する闘いは、国際根拠地化への

実体的な布陣であり、この建設過程における修正主義政治路線との直接的間接的対決は三プロク階級闘争の統合を必然的に軸化させ、真の革命派のヘゲモニーを逆に登場させ、世界的な革命と反革命の中間に位置する「労働者」国家や民族主義国家を分解止揚する萌芽を担う。

⑦ 各在外支部(これは世界中に三つで良い)は、相対的独自の運動を展開しつつ、在外支部責任者を通じた在日本指令部との不断の意志統一による党—支部の関係を堅持しつつ、相互批判を通して常に自らを世界へと位置づけること。

Cに①⑦として、提出した問題はアラブ支部の現実的要請であり、現在の段階では日本赤軍派そのもの実態・存在も判らないが将来的にはこうした関係に質的結合すべきと考えている。と同時に我々の母体再建にむけて可能な努力を貫くだろう。

この再建過程において「森一派に反対であった」という免罪符でよせあつめ到的に再建が進むなら、自らの日和見を合理化した部分、闘いを放棄した部分を包含せざるをえないし、我々が日本の同志たちに要請するのは、真に革命に自らの生命をささげよ

うとするひたむきな戦士の結合によって、小さな核からでも出発してほしいということである。もっとも困難な情況で、もっとも困難な方法で常に打ち勝ってきた我々にはそれがふさわしい。

待つこと、耐えること、思いきること、忘れることは、勝つことと相殺なんだと思う。三戰士は日本革命派への熱い愛と連帯をこめて、喜びに満ち、榮譽ある闘いを貫ぬいた。世界赤軍への萌芽を担った彼らは「我々は地獄で再び革命を準備する。先に行って用意している」と言い残して出かけていった。

日本の同志諸君、共に大胆に進もう。獄中の不屈の同志たちへの限りない尊敬をこめて。

〈アラブ赤軍 六・一五〉

① アラブ赤軍とは正確には、日本赤軍派在アラブ支部である。

② 我々が問題提起の対象としている日本赤軍派とは、正確には日本の革命戦争派(顕在・潜在を問わず)である。

③ 大衆という概念はあいまいに存在しているところの人々を含んでいる。